



なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠

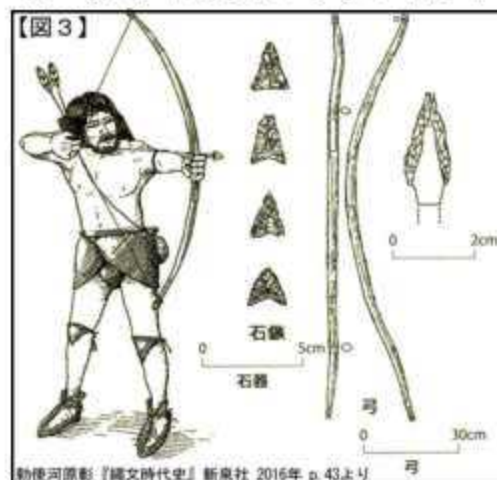


No.21

弓矢の登場が狩猟方法を変化させた

縄文時代を代表する道具は、弓矢と土器である。この弓矢と土器は、^{みこしば}神子柴・^{ちやうじやくぼ}長者久保文化の時期(縄文時代草創期)に使用が始まる。

弓矢は、弓の反発力と弦(つる)の^{ちやうりよく}張力とを組み合わせ、矢を遠くに飛ばす道具である(図3)。矢の先端は、^{せんたん}刺突力と一定の重さを必要するので、石の矢尻である^{せきぞく}石鏃が使われる。弓、弦、^{やがら}矢柄は植物が使われる。なお、石鏃は、骨角製の銚頭(もりがしら)の先端に付けて、漁労具としても使用されるので、弓矢に限定されるものではない。



一方、^{ゆうけいせんとうき}有茎尖頭器(図2)は、その大きさや重量から投げ槍の穂先であり、石槍(図3)は、^{いしやり}突き槍の穂先であると考えられている。この有茎尖頭器と石槍は、神子柴・長者久保文化では石鏃と一緒に発見される。セットで使ったのかも知れない。石鏃が本格的に普及するのは、^{りゅうきせんもんけいど}隆起線文系土器の時期(草創期の初めころ)である。そして、石鏃が普及すると、有茎尖頭器が段階的に消滅していく。

そのことから、日本列島では、弓矢が急速に普及するなかで、逆に投げ槍が急速に^{すいたい}衰退していった。ただ、北海道や東北北部では、^{えもの}獲物がイノシシではなくヒグマだったため、槍が使い続けられたと考えられている。

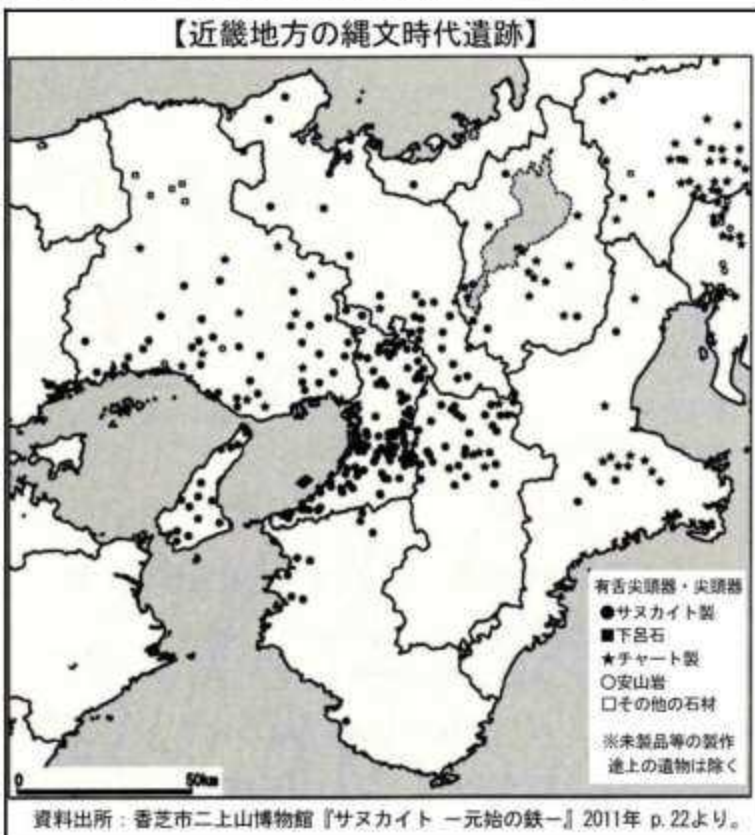
弓矢は、優れた狩猟具で、槍だけを使う時代よりも、捕まえる動物の種類を増やし、^{しやりようこうりつ}狩猟効率を飛躍的に高めた。弓矢は、獲物に近づかないで距離をおいて狩猟ができ、矢を多量に準備すれば、すばやく連続発射が可能となったので、人々の組織や仕事上の役割をも大きく変えた。それは、^{りゅうけん}獵犬と落とし穴という、旧石器時代とは異なる、^{たんでき}縄文時代的な狩猟スタイルが生まれたことに端的に現れる。



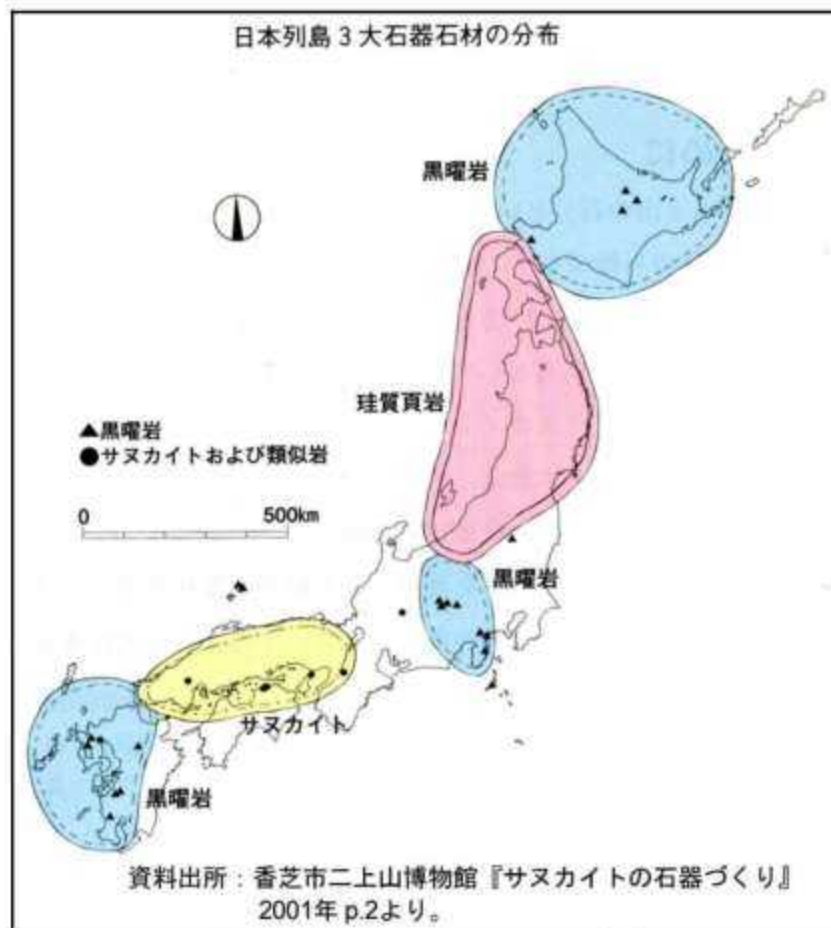
サヌカイトはどのように広がったのか想像してみよう

右の「近畿地方の縄文時代遺跡」を見ると、香川県の金山・五色台と奈良県の二上山でしか取れないサヌカイトで作られた打製石器が近畿地方一円の縄文遺跡から発掘されていることがわかる。このことは何を意味するのだろうか。

特に、二上山のサヌカイトは福井県の鳥浜貝塚でも発見されているし、近畿地方では香川県産の物よりも圧倒的に多く現れる。なお、旧石器時代の遺跡でも同じような出土状況である。



また、日本列島で打製石器の原料として使われた石材は、黒曜石、サヌカイト、珪質頁岩が三大石器石材とよばれる。それらの黒曜石や珪質頁岩を使って作られた打製石器も、全国各地の旧石器時代の遺跡や、縄文時代あるいは弥生時代の遺跡から広く



出土する。

なお、黒曜石は、全国で約70カ所の地域で採取できるけれども、北海道の物が石器石材としては最も上質だとされる。ちなみに、北海道白滝産の黒曜石で作られた打製石器はシベリアの遺跡からも発見されている。

このようなことをふまえて、旧石器時代や縄文時代の人々の他地域とのつながりを考えてみよう。